

ツイングゲーム

生き残るのはふたりだけ!

はちがみつき
蜂賀三月・作

といなな
問七・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

プログラグ

006

ツインズゲームへご招待

008

以心伝心サークル

020

双子ドッジ

044

二人三脚鬼ごっこ

074

再会と回想

107

五枚ババ抜き

116

五枚ババ抜き side:ウタ

140

束の間のティータイム

154

バトルロイヤル

174

研究室にて

214

伝わる力

224

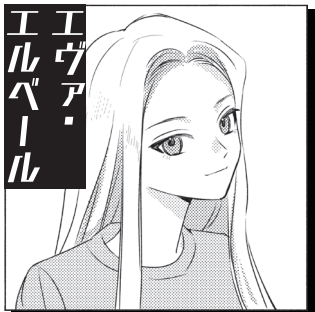
エピソード

229

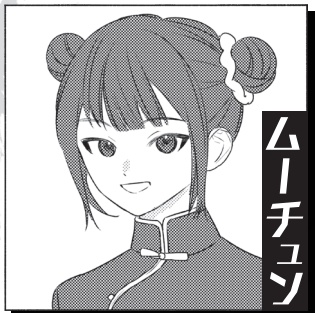
あとがき

234

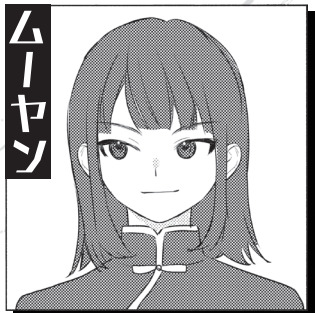
人物紹介



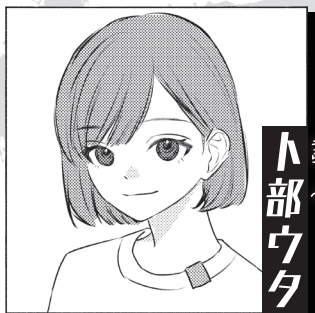
べんきょう うんどう ひとな いじょう かんべき ひょう たにん みくだ
勉強も運動も人並み以上にでき、「完璧」とも評され、他人を見下しがち。



しごと きけん こわ うんどうしんけい よ つよ
キレたり・仕事モードに入ると危険かつ怖い。運動神経が良く、ケンカが強い。

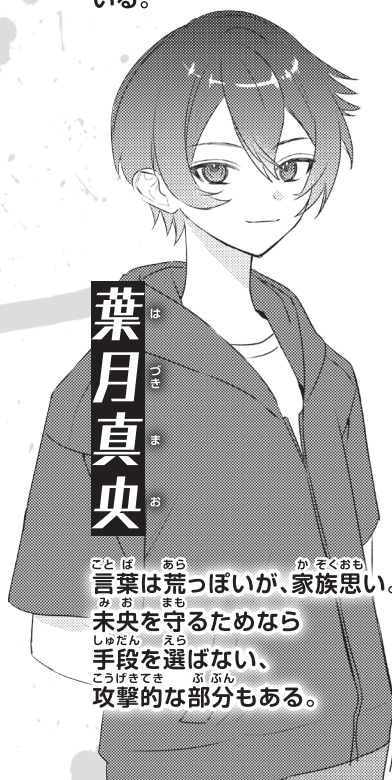


めだ や おも
目立ちたがり屋で、みんなにずっとちやほやされたいと思っている。



マスター・ マイスター

けんきゅうだいす べんじん
研究大好きな変人。
ツインズゲームの進行者。
まじめ み
真面目に見えるが、
しゃべりかた ようき
喋り方は陽気でねっとりして
いる。



ことば あら かぞくおも
言葉は荒っぽいが、家族思い。
み お まも
未央を守るためなら
しゅだん えら
手段を選ばない、
こうげきてき がぶん
攻撃的な部分もある。



かてい じじょう じぶん
家庭の事情で自分を
おころ せいいかつ
押し殺して生活している。
じごぎせい せいしん つよ
自己犠牲の精神が強く、
まじめ せいかく
やさしく真面目な性格。

プロローグ

— 助けて。

— まるで、夜の海に沈んでいくみたい。

— 寂しいの。

— ずっと、ずっと。

— 私をひとりに、しないで。

頭の中に、直接聞こえてくる声。

懐かしさを感じるその声の主を、俺は知っている。

そばにいらなくてもわかるんだ。

それなのに、居場所がわからない。

「ちくしよ……！」

俺は鏡の前に立つと、自分の顔を睨んだ。

「こんな怪しいゲームに頼りたくなかったけど……もう、手段を選んでられねえ」

目を追うごとに、悲しみの色が濃くなっていく。

深い海の底にいる。

強い雨に打たれている。

吹雪の中にひとり、立たされている。

そんな感情が声となり、次から次へと届いてくる。

俺は鏡に映る、自分の顔に触れた。

「俺はお前を、絶対に助けてみせる」

ツインズゲームへご招待

初夏の夕方。ぬるくて湿っぽい風が頬をなでる。
玉のような汗がおでこに浮かぶ。私の両手は買い物袋でいっぱいだ。
顔にまとわりついた髪を、手で払うことすらできない。
空からは、ゴロゴロという音が聞こえる。

「急がないと……」

雨が降りそうだからじゃない。あの人の機嫌が悪くなってしまいうから。
近道になる人けのない路地に入ったところで、スーツを着た男に声をかけられた。

「花鳥中学一年の、水上未央だな？」

その男はかけていたサングラスをずらし、私の全身をじろじろと見る。
知らない人に名前を知られているなんて、気持ち悪い。
だけど、それ以上に焦っていた。

——早く帰って、夜ご飯の準備をしない
といけないのに。

「……人違いじゃありませんか？」

その男は私の嘘なんてお見通しのようで、
両腕を広げて道を塞いだ。

「確認はもういい。捕まえろ」

振り向くと、スーツにサンングラスの怪しい
男がもうひとり。

どう考えても、やばい状況。

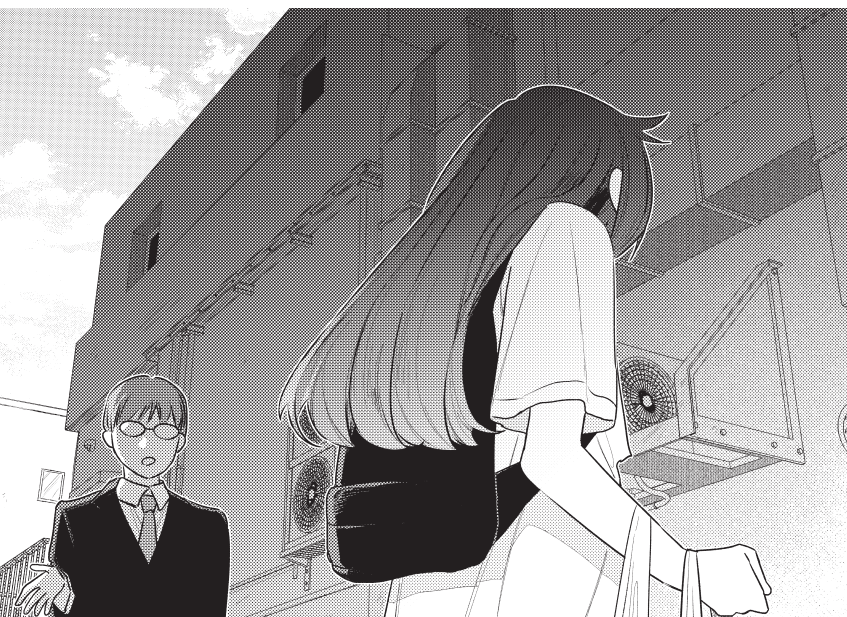
何かの事件に巻き込まれた？ 身代金目的

の誘拐？

「私の家は裕福じゃありません！」

そう叫び、一か八か走る。

でもすぐに捕まってしまって、私は地面に
組み伏せられた。



持っていた買物袋が、地面に落ちる。

こんなときなのに、袋の中の卵パックを心配している自分がいた。

今日はオムライスを作る予定だったのに……

「放してください！ 早く帰らないと——」

言い切る前に、口元に布のようなものを押し当てられる。

目に映っていた買物袋が、徐々にぼやけていく。

* * *

「……未央」

「おい、未央。起きろ」

「う……ううん」

私を呼ぶ声がある。

ゴシゴシと目をこすると、少しずつ視界がはつきりしてきた。

これは——鏡？

見慣れた私の顔が、目の前にある。

なんで鏡が？

私は路地裏で意識を失ったはず……？

不思議に思っ鏡に触れてみる。

ふにと柔らかい感触がした。

「ひいっ！」

びつくりして飛び起きる。

これ、鏡じゃない！

……私とそっくりな人が目の前にいるんだ。

ぶ、不気味すぎる。

「なんだよ、人をバケモノみたいに」

「な、なんですか？ あなたは誰ですか？ なんで私と顔が同じなんですか!？」

何これ？ どういう状況なの!？」

わからないことだらけで、頭が爆発しちやいそう。

私とよく似た顔をしたその人は、めんどくさそうにため息を吐いた。



「――落ち着け。俺は真央。お前の双子の、兄だ」

「わ、私が、双子ですか!？」

「その様子じゃ、母さんから何も聞いてなかったんだな。お前と俺が産まれてすぐに、両親は離婚してんの。お前は母さんに、俺は父さんに、それぞれ引き取られたってわけだ」

私はお母さんに「お父さんはすでに死んでるから」と教えられていた。

「そんなの、急に言われても信じられません……」

そう言いながらも、心から嘘だとは思えなかった。

この真央って男の子、髪の色も、目つきも、唇も、私と瓜二つなんだもの。

こんなにそっくりなら、双子じゃないほうが変だって思うくらい。

もつと詳しく話を聞こうとしたときだった。

ジリリリリリリリリリ!!

けたたましい鐘の音が鳴る。

目覚まし時計を何十倍もうるさくしたようなその音に、反射的に耳を塞ぐ。



「これはなんですか!？」

鐘の音がうるさすぎて、自分の声すらちゃんと聞こえない。耳を塞ぎながら、辺りを見回す。

さつきまでは目の前にいる兄と名乗る人だけを見ていたから気づかなかった。

今、私があるこの空間は……とても異様な場所だった。

真っ白な天井、真っ白な壁、真っ白な床。

全部の色がおんなじで、なんだかめまいがしてきそう。

色が同じせいでわかりにくいけど、とても広い。

体育館二つ分以上はありそうだ。

そして、ここには私たち以外にもたくさんの人がいた。

全員合わせたら、五、六十人くらいはいるかも。

「これって……なんの集まりなんでしょうか？」

私と同じように眠っていた人たちも、鐘の音で目を覚ましたみたい。

……その人たちを見て、私は言いようもない寒気を覚えた。

みんな、ふたり一組になつていて。そして、顔がよく似ていた。

「真央さん。ここにいろ人たちつてまさか——」

私が質問を言い終わる前に、マイクのハウリング音が耳をつんざく。

——キーンッ ガガッガガ——

『テス、テス、マイクテスト。みな様、お目覚めになりましたかあ?』

声がするほうに目を向けると、半透明の人間が宙に浮かんでいる。

幽霊……なわけないよね?

まわりを見ると、真っ白な壁から光が照射されていた。

原理はわからないけれど、プロジェクター

みたいなものなのかな?

半透明の人間——白衣を着たお姉さんは、陽気に手を振っている。

髪はオレンジ色のモコモコしたパーマ。

顔に収まりきらないくらいのおおきなメガネが特徴的だ。

『ちゃんと声は届いてるみたいねえ。みなさん、本日はお集まりいただきありがとうございます。さっそくではございますが、ここに最強の双子を決める、ツイングゲームの開催を宣言いたします！』

まわりにいた双子たちからワツと声があがる。

双子たちはやる気を出しているのか、肩を組んだり励まし合ったりしていた。

「あの、真央さん」

「真央でいい。同い年の兄妹なのに、さん付けはおかしいだろ」

私はさん付けしたほうが呼びやすいんだけど……

でも、そう強く言われると断るのも変な気がした。

「で、では……真央。教えてください。ツイングゲームってなんですか？ なんで私はここに連れてこられて、あなたと一緒にいるんでしょうか？」

真央は顔を伏せる。

「勝手なことをしたのには謝る。だけど、こうするしかなかったんだ」

そんなの、全然説明になってない。

理由はわからないけど、真央の意思で私はここに呼ばれたみたいだ。

何をどう聞か迷っていると、白衣を着たお姉さんが喋り出す。

『みんな、やる気は充分のようね〜！ あ、挨拶が遅れたわね。わたしはこのツイングゲームの進行役を務める、マスター・マイスターちゃんです。気軽にマスターと呼んでねん〜』

マスターというお姉さんは、白衣を着ていて真面目そうに見えた。

だけど喋り方は陽気で、なんだかねつとりとした感じ。

会場にいる私たちに向かって投げキッスまでしているし……

『さてと、ツイングゲームについてあらためて説明しないとね〜 このゲームは、全国から集まった三十組の双子の中から、最強の双子を決めるゲームなの。優勝した双子には、賞金一億円がプレゼントされちゃうのよん』

「さ、一億円!？」

すっとんきょうな声が出てしまった。

真央はお金欲しくて、このゲームに参加したの？

『一億円だけで驚いてちゃダメよ〜。さらに副賞として、優勝した双子の願いを一つだけ

叶えてあ・げ・る♡』

「一億円に願うことまで叶う？」

「そんなの……ただのゲームのはずがない」

私がぼそりと呟くと、マスターの口が三日月のように吊り上がった。

『あなた！』

マスターは私をビツと指さす。

『察がいいわねえ。このゲームで優勝すれば、大金を手に入れられるうえに、願うまで叶う。わたしたちの力があれば、この世のほとんどの願うことは叶えられる。だけど……チャンスにはリスクが付きまとうもの。あなたたち双子には——人生を賭けてもらうわ』

……人生？

マスターのその言葉に、騒がしかった周囲が一瞬で静かになる。

『え、どうして静かになってんの？ ツインズゲームの申し込みをするときに、参加者には相応のリスクが与えられるって説明があったでしょ？』

この異常な空間と、怪しい会場。

ドツキリにしてはあまりにも本格的すぎる。

決して冗談ではなさそうだ。

……真央には悪いけど、私はそんな危ないゲームには参加できない。

私はおずおずと手を挙げた。

「……すみません。私、このゲームに参加申し込みしてないんです。失格でいいので、家に帰してくださいませんか？」

『それは無理な話ってわけえ』

マスターは指でバツを作る。

『双子は運命共同体。どちらかが申し込んだなら、正式なエントリーになるのよん』

「そんな……！」

双子でも他人は他人。ましてや、今まで存在すら知らなかった兄なのに。

私は真央を見る。見れば見るほど、私の顔に似ていた。

真央は何かを決意したように、強い口調で言った。

「未央、悪いが諦めてくれ。俺たちはこのゲームで勝つしかないんだ」

「諦めるも何も、わからないことが多すぎて——」

喋っている途中で、マスターがパンパンと手を叩き、注目を集める。

『はいはい！ さつそく第一ゲーム、以心伝心サークルを始めるわよ』
人生を賭けたゲームに参加するなんて、ありえない。
ましてや初対面で、赤の他人同然の双子の兄となんて。

以心伝心サークル

マスターがパチンと指を鳴らすと、会場の床が虹色に輝いた。

「おお、すげー！」

危機感がないのか、真央が感心したように言う。

何が始まるかはわからないけど、確かにすごい。

まるでテレビゲームの中にいるみたいだ。

マスターは得意げにふふん、と鼻を鳴らす。

『すごいでしょう？ ゴーグルやメガネで仮想現実に入れるものはあるけど、このツイ
ンズゲームはそんなレベルじゃない。最新技術を詰めに詰め込んだこの会場では、超リア

ルな仮想空間を作ることが可能なの』

マスターがもう一度指を鳴らす。

すると、私と真央がいる床がオレンジ色に染まった。

円状にその色が広がって、ちょうどお互いの腕を広げたくらいの大きさになる。

ほかの参加者がいる床も同じように変化していた。

違うのは床の色。

紫、赤、緑、さまざまな色の床の上に、双子が立っている。

会場をもう一度ぐるりと見渡す。出口どころか扉すら見当たらない。

気持ちは進まないけれど、ゲームに参加するしかないみたいだ。

そのとき、少し離れたところで言い争う双子がいるのに気づいた。

マスターも気づいたようで、手をそのペアに向ける。

スマホをズームするように指を広げる動きをすると、ふたりの映像がマスターの背後に

映された。

『面白いことはみんなにも共有しないとねえ』

私と真央と同じ、男女の双子みたい。

映像をじつと見ていると、ふたりの声が会場に流れ始めた。

『わたしはこんなゲームしたくない！ もう帰るからね！』

『待って！ 大金持ちになれるチャンスなんだからさ！』

映像だけじゃなく音声まで。

この会場にはカメラだけじゃなく、いろんな場所にマイクが仕掛けられているのかな。女の子は、男の子が止めるのを無視して離れようとする。

そうして、色づいた床の“外”を踏んだ。

その瞬間――

バリバリバリイッ！

『きゃあああああああああああ！』

その女の子は体を大きく跳ねさせて、倒れた。

髪の毛が逆立って、全身から小さな煙があがる。

バリバリバリイッ！

『うわあああああああああ！』

少しだけ間をあけてから、男の子も同じように倒れた。

会場がざわつく。

……演技じゃないよね？ 体から煙なんて、なぜ？

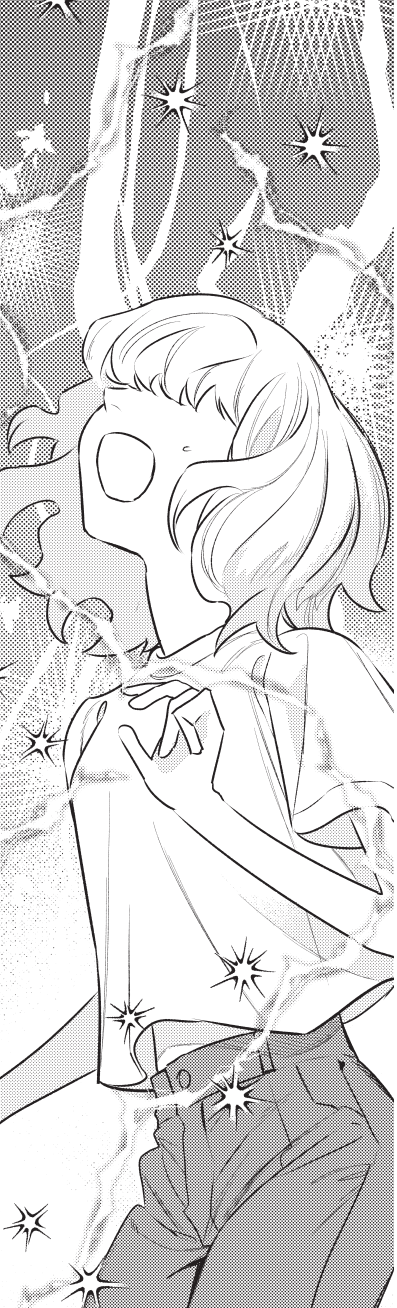
マスターはパン、パン、パン、とたまらないように手を叩いた。

『あはっ！ 双子なのにもうケンカ？ 注意してねえ。みんなが立っている色がついた

円……その外に足をつけてしまったら、強力な電気が流れる仕組みになってるの』

「そんなっ……」

どこからかお肉が焼けたようなにおいが漂ってきて、背中がぞわつとする。



火傷するような電気を浴びてしまったのだとしたら。
あの子たちは……

『脱落したペアはー、回収回収♪』

マスターが指をさすと、双子がいた場所の床が開く。
倒れた双子は、びくりとも動かず、無言で床の下に落ちていった。

「っ……………」

私と真央は、できるだけだけ円の中心に身を置きなおす。

このゲーム、本当に人生を……命を賭けてるんだ。

真央がゴクリと唾を呑み込む音が聞こえた。

『さっそく失格者が出たのは残念だけどお、それはそれってことで』

マスターは、ずれたメガネをかけなおす。

『あらためて、ルールの説明をするわね。以心伝心サークルは双子の心がどれだけ通じ合っているかを確かめるゲームよ』

マスターの背後にルールが表示される。

《以心伝心サークルのルール》

- ・ 双子のペアは、質問に解答する。
- ・ 解答は目の前に表示される入力画面を使って行う。それ以外は認めない。
- ・ 質問の内容は、それぞれの双子に関するもの。
- ・ 解答が揃えば正解とする。
- ・ 不正解の場合、床の円が小さくなる。
- ・ 円の外に足がついた場合、脱落となる。

ざわざわと胸騒ぎがした。

参加者全員が同じクイズに答えるなら、まだチャンスはある。

私は正直、勉強は人並み以上にできる。

テレビでやっているクイズ番組だって得意だし、芸能人より答えるのも速い。
だけど、これは解答を揃えるクイズ。

『産まれたときからずっと一緒に双子なら、とっても簡単なゲームだよね〜』

私と真央は顔を見合わせる。

今日初めて会った私たちが、クリアできるわけない！

さつき電気を流された双子の叫び声を思い出して、体がぶるつと震える。マスターは説明を続けた。

『もちろん、不正は許さない。声を出して解答を教えようとするれば即失格だからねえん。十問の質問のあとに、ペアが無事にサークル内にいればゲームクリア！』

ジリリリリリリリリリ!!

うるさい鐘の音と同時に、宙に浮いているマスターが何体にも分身する。そして、それぞれのペアの前に移動した。

さつきよりずっと近くに来たマスターは、私たちに笑顔を向ける。

『さあさあ、準備はいい？ 以心伝心サークル、スタートよんっ』

真央と話し合いもできないまま、第一ゲームが始まった。

ジャジャン♪

人生を賭けているとは思えない、コミカルな効果音が鳴る。

同時に、私たちの目の前に、半透明のパネルが表示された。

すごい……

こんな危ないゲームじゃなかったら、もつと素直に驚けるのに。

真央のパネルは私からは黒く表示されていて、見る事ができない。

スマホの覗き見防止フィルムみたいな感じ。

マスターにバレずにカンニングするのは無理だろうな。

『第一問、水上未央が好きな飲み物はな〜んだ？』

クイズじゃなくて、本当に質問なんだ。

私は問題なく答えられる。だって自分のことだもん。

でも、真央とは今日会ったばかりだし、真央が答えられるはずがない。

それとも、双子なら本当にわかり合えるの……？

私は解答を入力する。

スマホのような感触はない。だけど、指で触れた部分の文字が確かに入力されていく。

『さて、入力が終わったみたいだね。それでは解答発表〜！』

ドクン、ドクン———心臓の音が大きくなっていく。

『水上未央の解答……緑茶！ 葉月真央の解答……ミルクティー！ 不正解！』

ブブー！

お決まりの失敗音が鳴る。

そして私たちが乗っているオレンジの円が——ぐんと小さくなった。円の小ささに、血の気が引いていく。

隣で、チツという舌打ちの音が聞こえた。

「緑茶好きとか渋すぎだろ！ わかるはずねえって！」

「す、すみません」

思わず謝ってしまう。

私の兄は少し……うん、かなり喋り方が荒っぽい。

嫌な気分になったけど、少しでも関係性をよくしないと、このゲームに負けてしまう。

私はぐつと我慢して、真央に話しかけた。

「そ、それなら……真央は何が好きなんですか？」

「俺は抹茶だ」

「似たようなものじゃないですか！」

「全然違うっつーの！」

マスターは言い合う私たちを見て、笑いを噛み殺している。

とても私の兄とは思えない。

だいたい、私は勝手に巻き込まれたのに。

『それでは二問目、いっくよー！』

ジャジャン♪

『第二問、葉月真央の好きな食べ物は何？』

わかるはずがない。

ご飯と一緒に食べたことすらないのに。

……でも、適当に答えるわけにはいかない。

落ち着いて、私。

このゲームに失敗したら、電気を流されてしまうんだから。

気持ちを切り替えて、考える。

双子は容姿だけじゃなく、好きな食べ物や趣味が似ることもあるらしい。

私と真央の顔はそっくり。それに、好きな飲み物も緑茶と抹茶で似てるとも言える。

「だつたら、私が一番好きな食べ物を……！」

「解答を入力する。真央も解答が終わったようだ。」

「祈るように手を組んで、マスターを見つめる。」

『**それでは結果発表！ 水上未央の解答、オムライス！ 葉月真央の解答、オムレツ！**

不正解！

「ブーッ！」

「しゅーつとしぼむように床の円が小さくなっていく。」

「またハズレか！ 悪いけど近づくとぞ」

「は、はい」

「出会ったばかりの人とこんなに体を近づけるなんて。」

「仕方ないけど、正直氣まずい。」

「二問不正解になっただけなのに、想像よりもずっと円が小さくなっている。」

「もし何かの拍子で転んだら、円の外に手をついてしまおうだろう。」

「まだ動ける余裕はあるけど……」

「だけど、ここで一つ希望が見えた。」

「——さっきの考え方は間違いない。」

「オムライスとオムレツは似ている。」

「趣味や好きなもの話なら、私の好きなものを答えればいい。」

「それなら真央の好きなものと同じになる可能性が高い。」

「決して確実な方法ではないけれど……ほかに手はなさそうだ。」

「私は真央に声をかける。」

「あの、さっきは緑茶なんて答えてすみませんでした」

「ゲームをクリアするために、協力しないと。」

「別に怒ってない。いや……怒っているように聞こえたなら悪かった。それと、敬語じや

なくていいぞ」

「敬語は……このほうが話しやすいのでこのままです。クセみたいなものなんです」

「それならいいけどよ」

「さっきは嫌な気分になったけど、そこまで悪い人じゃないのかもしれない。」

「ほっとしたのも束の間、マスターが三問目を出題する。」

「ジャジャン♪」

『第三問、葉月真央の好きな授業科目は、な〜んだ？』

私が好きなのは、国語。

私は小説が好きで、図書室で本を借りるのが習慣なの。だから、きつと真央も……
真央を信じて、私は解答を入力した。

『はい、それじゃ解答を発表するわあん。水上未央の解答、国語！ 葉月真央の解答、国語!! 大せいかい!』

ピンポンピンポン!

正解の音が鳴る。床の円が広がるわけではないけど、その音がすごく嬉しい。

この調子で正解していけば、クリアできるかも!

ジャジャン!

『第四問、ふたりが産まれた都道府県はどこ?』

これは……ますい。

好きなものや得意なものなら、さつきみたいに自分の好きなものを解答したらいい。
だけどここの問題は、自分の好みじゃなくて「本当の答え」がある。
産まれた場所がどこかなんて知らない。

というか、真央が今どこに住んでいるかも知らないもの。

必死に頭を回転させる。

何か、何かヒントになるような記憶はない……?!

私は目を閉じて、深呼吸をする。

集中しなさい、未央。

——運にゆだねて解答したら、正解は四十七分の一。

少しでも答えを絞らなければいけない。

ヒントになりそうな情報を、一つでも思い出すんだ。

私が今、住んでいるのは岐阜県。

岐阜県はもととお父さんの地元だと、お母さんがこぼしていた。

それと、お母さんはちよつと関西の方言がある。

私は岐阜で育ったけれど、お母さんの喋り方がうつつたのか「関西の発音だね」と言わ
れたことがある。お母さんは関西出身。出産するなら、里帰りした可能性がある。

賭けにはなるけど、関西だと考えたほうがいいかも。

『チツチツチ……時間制限もあるから気を付けてねえ』

あごに手を当てて考えていると、マスターが解答を急かしてくる。こっちは命がかかっているのに……

汗があご先を伝って、ぼつりと床に落ちた。

岐阜県は選択肢からはずそう。

関西まで絞り込むと二府四県。

大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県。

でもお母さんはコテコテの関西弁ではない。

近畿地方によくある方言と言ったほうが正しい気がする。

そうなるよと京都、滋賀、兵庫、それと関西ではないけれど三重も含まれるだろう。

それなら……滋賀県に賭ける。

岐阜県は滋賀県と三重県に近い。

お父さんと結婚したということは、どこかで出会うタイムリングがあったはずだ。

仕事の繋がりで、友達の間でも、距離が近ければ近いほど可能性は高くなるはず。

これ以上はもう絞れない。

私は解答を入力する。

お願い……！

「**やっと解答が出たわねえ。……水上未央の解答は滋賀県！**」

私の推理……当たれ！

『**葉月真央の解答は……滋賀県！**』

ピンポンピンポン♪

正解の音が鳴る。

私は思わず、わつと喜んで真央の手を取った。

「やった！ 正解できました！」

「俺は父さんから聞いてたけど、未央は知らなかったのか？」

「はい。だから考えて考えて滋賀にしたんです」

私がそう言うと、真央はふつと笑った。

「すげーじゃねえか。さすが俺の妹だ」

褒められると、なんだか心の奥がむずむずした。

誰かに褒めてもらえたのは、ずいぶんと久しぶりな気がする。

でも、喜べたのは一瞬だけ。

すぐに次の問題が始まってしまった。

ジャジャン♪

『第五問！ ふたりが昨日食べた夜ご飯は？』

さつきまでの高まつていた気持ち冷めていく。

こんなの、合わせようがないじゃない。

私たちは一緒に暮らしてないんだから。

「おい、なんだよ、この問題！」

真央はマスターに食ってかかる。

マスターは目を細めて、ニヤニヤした。

『これはサービス問題だよ？ それとも、双子なのに一緒に暮らしてないなんて言わな

いわよね？』

まさか、私たちが一緒に暮らしてないのを知ってる？

わかっていて、問題を出したんじゃないの？

『さあ、解答してね』

……ダメだ。

真央の食事を推理する方法が思いつかない。

仕方なく、できるだけ食卓に並びそうなメニューを入力する。

『解答が出たね♪ 結果は……』

ブブーッ！

『不正解！ 水上未央の解答はカレーライス！ 葉月真央の解答はハンバーグ！』

マスターが指を鳴らし、床の円が小さくなっていく。

私と真央は、くつつかなければ円の上に立っていられなくなった。

どっちも、焦りからか息が荒くなっている。

そのときだった。

「ぎやあああああ！」

どこかから、悲鳴が聞こえた。

また焦げたにおいがしてきたので、思わず息を止める。

『あらら、二組目の脱落者が出てる。ざんねくん、一問も正解できないなんて』

残念と言いつつも、マスターの顔は喜びに満ちている。

脱落していく双子の姿を見るのが、嬉しいの？

——そして、今脱落者が出たってことは……

同じことを考えていたのか、真央が私に話しかけた。

「おい、未央」

「はい。わかっています」

私は深呼吸をする。冷静になって、思考を巡らせる。

今まで出た問題は五問。

マスターはさつき、脱落したペアのことを『一問も正解できないなんて』と言っていた。つまり五回不正解になったら、色付きの床の上にはいられる可能性はほぼないと考えていいだろう。

今、私たちの正解数は二問。不正解数は三問。

あと二回間違えたら、ゲームオーバーだ。

今まで出た問題を振り返ってみると、今後も確実に正解できるかどうかは怪しい。

私たちが今日初めて会ったという事実が、また重くのしかかってきた。

私の不安なんて関係なしに、また陽気な効果音が鳴る。

ジャジャン♪

『第六問！ 水上未央の大切な人は誰でしょう？』

これは……なんて解答したらいいの？

円からはみ出たら、ふたりとも電気で死んでしまう。

その恐怖が、じりじりと足元から這い上がってくる。

落ち着け——私と真央の共通する人で、私が解答できるのは「お母さん」しかない。

震える指で解答を入力する。

お互いのことはわからなくても、ふたりに共通するものから解答を推測するしかない。

真央は、時間をぎりぎりまで使ってようやく解答した。

『やっと解答しましたね。第六問の結果は……水上未央、お母さん！ 葉月真央……りよ、緑茶？』

「緑茶!？」

私はマスターの解答にかぶさるように叫んでしまった。

ブブーッ！ という効果音が鳴り、円が小さくなっていく。

「やばい、やばいって！」

私と真央はさらにくつつつき、足が重なる。

真央の体温が、服越しにでも伝わってくる。
体も半分寄りかかるような形になってしまった。
本当にどうにか、円の上に立っている状態だ。

この状況でふざけた解答をするとはとても思えない。

きつと今の解答には何か意図がある。

落ちて着いて、よく考えるんだ……!

マスターは面白くなさそうに、こちらを見ている。

『諦めちゃったの？ でも、ルールはルールだからね』

円から出てしまえば、マスターは容赦なく電気を流すだろう。

疲れからか怖いからなのか、私の膝は震えていた。

マスターは次の問題を読み上げる。

ジャジャン♪

『第七問、葉月真央の嫌いな人は誰でしょう?』

これは……真央が好きな人なら「お父さん」と解答すればいい。

だけど嫌いな人となると特定するのは難しいんじゃないだろうか。

もしくは「お母さん」と答える?

いや、それもなんだか違和感がある。

真央がさつき「緑茶」と解答した意味は……

——そうか、わかった!

真央はすでに入力を終えている。

私も慎重に、解答を入力した。

『解答が出たみたいねえ。水上未央の解答は……緑茶? 葉月真央の解答も、緑茶……!?』

マスターが眉をひそめる。

『これ……問題の解答になってないわよ?』

マスターがこちらを睨みつける中、正解音が鳴り響く。

ピンポンピンポン♪

『ちよっと、これ正解にしていわけえ?』

真央はにやりと笑った。

「ルールに書いてあったよな。解答が揃えば正解とする。つて

私もうなずく。

「解答が真実かどうかなんて関係ないですよ。答えさえ揃っていたら、正解なはずですよ。」
真央が一目目の解答とまったく一緒の『緑茶』と解答して、そのことに気づいた。

これは、このゲームのルールを利用した裏技だ。
どんな質問が来ても、関係ない！

「くっ……！」

マスターは悔しそうに問題を読み上げていく。

『第八問、水上未央が好きなマンガは？』

緑茶。

ピンポンピンポーン♪

『……第九問、葉月真央の親友は誰？』

緑茶。

ピンポンピンポーン♪

『……第十問、ふたりは今、どんなことを考えている？』

緑茶。

ピンポンピンポーン♪

全十問。無事に解答した。

私たちの床の円は小さいけれど、無事に立つことができている。

マスターは不機嫌そうな声で、私たちの最終的な結果を読み上げた。

『未央・真央ペア。正解六問、不正解四問。』

以心伝心ゲーム、クリアよ……！」

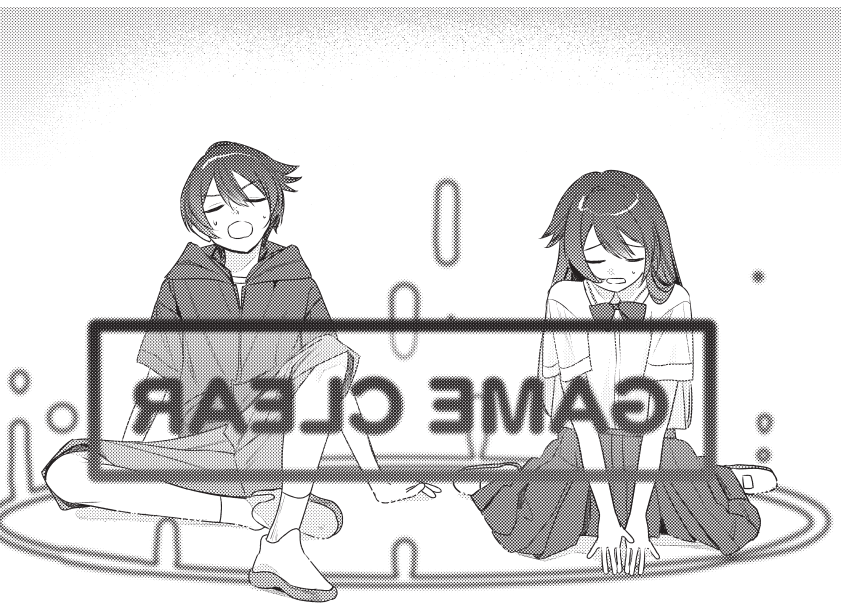
マスターが指をパチンと鳴らす。

すると私たちの立っている床が虹色に光って、ゲームクリアと表示された。

緊張が解けて、私はへたりと座り込む。

今になって、恐怖で腰が抜けてしまったみたい。

あらためてまわりを眺めると、ゲームに失敗して倒れている子たちが何人もいた。



「怖かった……」

体がまだ震えている。

あと一問間違えていたら、私たちも同じように倒れていたのだろう。

真央もあぐらをかいた。

「未央、俺の作戦に、よく気づいてくれたな」

「なんとか。でもこんな裏技、よく実行しようと思いましたがね」

真央は口角を上げる。

「裏技でもなんでも、未央と優勝するためにはなんだってやるさ」

……私と優勝するためと言うけど、真央とは今日初めて会ったはずなのに。

「あの……」と口を開いた瞬間、またあの耳をつんざく鐘が鳴った。

双子ドッジ

ジリリリリリリリリリリ！

『はいはい、注目〜』

いつの間にかマスターの分身は消え、会場の中央に戻っていた。

『まずは以心伝心サークルの結果を伝えるわねえ。脱落は十組で、残りは二十組よん』

そんなに多くの双子が脱落したなんて。

十組つてことは二十人も人があの強力な電気を流された計算になる。

お肉が焦げたにおいを思い出して、また気分が悪くなってきた。

『さてさて、次のゲームを始める前に……。ペアで手を重ねて、床に触ってえ』

嫌な予感しかない。

だけど、逆らえば電気を流されるだろう。嫌がる子は誰もいなかった。

「未央、手を置くぞ」

「……はい」

私たちは手を重ね、そつと床に触れる。

ガチャンツ!

「きゃあ!」

突然床から手錠が飛び出してきて、私たちの手首にはまった。

真央の左手と私の右手が、ずっしりと重たい手錠で繋がれている。

マスターはウインクをした。

『頭を使ったら体も動かしたくなつたでしょ? 次のゲームは、双子ドッジボールよ♡』

とたんに、会場の床に色付きのコートが二つ現れた。

コートはちょうど半分ずつ、赤と青、黄と緑に分けられている。

「ドッジボールつて……手錠が繋がれていたら、自由に逃げられないじゃないか!」

会場の双子が、マスターに抗議する。

『双子なんだから、息を合わせればなんてことないでしょう? さあさあ、十組ずつ、二

つに分かれて。半分に分かれたら、もう半分よ』

「あいつ……双子をなんだと思ってるんだ?」

真央はぶつぶつと文句を言いつつ、コートへと向かう。

手錠があるせいで、私は真央に引つ張られるようになった。

「真央、待ってください」

「あ、悪い」

歩くだけでもうまくいかない。こんな状態でドッジボールなんてできるの?

胸騒ぎがする。

私たちは一番近くにある、青いコートに入った。

双子全員がコートに入ると、マスターは両手を天井にかかげる。

『壁ちゃん! 出てきてー!』

ゴゴゴゴゴ……!

コートのまわりの床がせり上がり、大きな壁ができていく。

この会場、どういう仕組み?

なんだか、巨大な虫かごに閉じ込められたみたいだ。

『これ、観察しやすくていいわあ』

マスターが天井近くでクスリと笑う。

その背後に、ゲームのルールが表示された。

《双子ドッジのルール》

- ・双子ドッジボールは五対五で行われる。
 - ・外野はなし。ボールに当たったら即刻退場。
 - ・ボールを持っていい時間は三分まで。
 - ・ノーバウンドで二組が続けてボールに当たった場合、そのボールを捕れば二組ともセーフ。捕れなかった場合は二組ともアウトとする。
 - ・試合は二十分経つか、どちらかのチームが全滅するまで続けられる。
 - ・二十分が経った場合は、残っている人数が多いチームの勝ち。
 - ・このゲームはチーム戦。
- ボールに当たって退場しても、自分のチームが勝てば次のゲームに進める。

今立っている床の色で、チームが分けられるみたい。

ということは……私たちは青チームね。

外野がないってことは、ボールを投げたら、ほぼ必ず相手にボールが渡る。つまり、順番にボールを投げる展開になるはずだ。

『うんうん。さすが選ばれた双子たち、もうルールを理解したみたいで助かるわあ』
マスターは機嫌よく、私たちの様子を見ている。

「基本的には、普通のドッジと変わらねえみたいたな」

真央は屈伸をして、足の筋肉をほぐしていた。

さっきのゲームより、ずいぶんと自信がありそうだ。

「真央は運動が得意なんですか？」

「ああ。さっきは国語って答えたけど、同じくらい体育も好きだ。未央もだろ？」

「私は……運動得意じゃないです」

「マジかよ!? 嫌いなのか？」

「嫌いではありませんが……」

家ではずっと勉強と家事しかしてこなかったし、外で遊ぶ機会なんてなかった。

「ドッジボールなんて、ほとんどしたことないです……」

心臓がどくんどくと音を立て、不安な気持ちが大きくなる。

マスターはポケットからホイッスルを取り出した。

『それじゃ、試合開始ー!』